

「貧困の連鎖」解消めざして 一人ひとりとの対話が生み出す「希望」



彩の国子ども・若者支援ネットワーク
前代表理事

白鳥 勲さん

プロフィール 埼玉県立高校教職員として39年間勤務、退職後の2010年より生活困窮世帯の小・中・高校生対象に無料学習教室、家庭訪問での生活・学習相談活動を全県規模で続けている（通称アスポート事業）。全県で110教室を運営し、低学力・不登校・引きこもり・ヤングケアラー・虐待など様々な困難をかかえる生活困窮世帯約2000世帯を対象に支援活動を展開している。元埼玉県高等学校教職員組合書記長

貧困世帯で育って

私は兄弟3人の末っ子で川口市で生まれ育ちました。父親は鋳物工です。「け

い肺」を患ってあまり働けず、母親も病気がちのため、典型的な生活困窮世帯でした。そのため、兄2人は中学校卒業とともに就職しました。たまたま困窮世帯で生まれたことで高校に行けなかったり、勉強ができなかったりすることにたいして、私は子どもなりに疑問に感じな

がら過ごしていました。私も家の経済状況から中学校を卒業したら就職をしないといけなかったのですが、兄が就職をしてくれたおかげで、浦和工業高校に進学することができました。

当時、浦和工業高校には私と同じような困窮世帯で育った生徒が多くいました。大学へ進学する生徒もほとんどいなかったことで偏差値を気にすることもありません。成績競争のない世界です。その

なかで、自分が不得意なことを得意な生徒に教えてもらったたり、逆に自分が得意なことを教えてあげたりする場面が多くありました。お互いに支え合うことのよさに気がつきました。

私は1年浪人して、アルバイトをしながらお金を貯めて、東京教育大学（現筑波大）に進学しました。大学では、学生は社会問題に関心を持ち、自治会活動が盛んな時期で、私も自治会活動に力を入れていました。子どもたちへの教育を通じて社会を変えていこうという思いもあり、教員になる道を選びました。

1人5分程度の 立ち話を毎日

39年間の教員生活のうちの30年間、地域のもっとも困窮世帯の子どもたちが集まる、いわゆる「困難校」といわれる高校に勤務しました。問題を起こす生徒もいますし、中退する生徒も多い。教員とぶつかる生徒もいれば警察沙汰を起こす生徒もいます。でも、どれも自分自身が高校時代に経験していたことなので、違

和感はありませんでした。

私が担任を持ったときに心がけて実践していたことがあります。1日最低2人の生徒と1人5分程度の立ち話をするということです。そうすると20日間で大体全員の生徒と立ち話することになります。子どもが抱える課題や悩み、私自身が子どもに訴えたいことなど、子どもたち全員と平等に対話をします。このとき、職員室に呼んだりはしません。教室の窓際で同じ景色を見ながら、「最近調子はどうだ」「この前のテストの点数よかったな」「最近彼女とはどうだ」「気になってるんだけど、あいつ最近使いつぱしりになってないか？」など、話題はたくさんあります。将来の悩みや、私にしてほしいことなどを聞くこともありました。忙しいので長い時間はとれませんが、短い時間でも、生徒一人ひとりと平等に対話することが、あらゆる実践のベースになっていました。

運動会や修学旅行などの行事の前は、子ども同士の間関係がいきらかに難しくなることがあります。普段の生活のなかでも、お昼ごはんをいっしょに食べる友だちが変わったり、1人で食べるようになったりすることがあれば、友だち同

士でなにかトラブルがあったのかもしれない。対話を繰り返して信頼関係がうまくないと、こういった情報を全部話してくれました。その結果、いじめを事前に防ぐことにもつながっていました。「困難校」といわれる学校での生活のなかで、最低限、いじめなどで子どもたちを「自殺」させないこと。トラブルを人生のトラウマにさせないこと。そして、友だち同志で支え合うようになってほしい。そういう学校生活をつくるためには、子どもの世界でなにが起きているのかを、上辺だけでなく知ることが必要です。そのためには子どもと対話するしかありません。

そして、対話のあとが大切です。対話のなかで子どもたちから依頼されたことはできるだけ実現させるようにしてきました。話を聞くだけでは子どもたちとの信頼関係は築けません。それに応えることが必要です。

でも、どんなにがんばっても自分1人ですべてに伝えることには限界があります。学年、学校全体で応えていくことが大切です。自分の実践は固有財産ではありません。あらゆる教員の実践の一部なのだから、それをもとにお互いに助け合

うことが必要です。赤点をとった生徒がいたら、その教科の先生に補習をお願いしたり、部活動で悩んでいる生徒がいたら顧問の先生に相談することもありました。子どもたちの願いを実現するためには、多くの教員、事務職員などで協力することが大切です。

この実践の基盤となっていたのが、教職員組合での活動です。子どもたちのことを語り合ったり、さまざまな問題にとりくんできました。しかし組合活動を続けることは大変なたかひでした。仲間を増やして組合を強くするためにはどうしたらいいかを考える毎日でした。

校門の外での支援が必要

教員をしていてショックだったのは、私が学年主任をしていた学年で201人入学して81人が中退したことです。この生徒たちの家庭訪問をしました。中退は生徒自身の自己責任ではないということを感じました。家庭環境からそうせざるをえない生徒が多くいたことを知り、困

窮世帯にいる子どもたちを、なんらかの支援でバックアップしないといけないと思いました。

就職相談で、調理師の夢を持ったひとり親世帯の生徒が、その夢をあきらめて手取り給料がいい別の仕事を選ぶことがありました。どうしてと聞くと、生徒の「俺は生きていければいいから」という言葉を聞いて、なんともいえない気持ちになり、これは大人としてなにかしなければいけないと思いました。校門の中ががんばっても限界があります。教員を退職したら校門の外で子どもたちの支援をしたいと考えました。

退職後、埼玉県の福祉部が、生活保護世帯の進学率が低いことから無料の学習教室と家庭訪問での教育相談事業をはじめめることを知り、事業委託に手を上げました。

その年に160世帯の家庭訪問をしました。私は教職員組合の書記長をしていたのでことがあるので、たくさん仲間がいました。その仲間たちと法人をつくってとりくんだ結果、不登校で進学をあきらめていた40人の子どもたちが全員高校へ進学しました。その5年後にはスポーツ事業が先進的モデルになり、生活

困窮者自立支援法による学習生活支援として制度化されました。

変化成長する子どもたち

これまで一生涯家庭訪問をして、一対一で勉強を教え、子どもたちの願いを聞いてきました。そのなかで、「自分はまわりの大人たちから大事にされている」ということを実感できた子どもは必ず変わる、ということを学びました。どんなに勉強ができない子どもでも、学びを絶対に投げさせないことが大事です。中3になって、やっと分数がわかるようになって泣いてしまった子どももいます。分数がわからなかった世界から分数がわかる世界が広がることは、子どもにとっては希望なんです。本来、学習は子どもの世界をちよつとずつ広げるよるこびがあるものです。新たな世界を広げるための学びを1人ひとりに保障することが、いまの日本の教育のなかで決定的に大事なことです。

不登校などの問題を抱えた子どもは、

学校のさまざまなイベントで中心になった経験が一度もありません。アスポートの学習教室では、おやつ配りやクリスマスなどのイベントをおこないます。企画立案、役割分担からまかせると、子どもたちはいきいきと動きます。学校教育から排除されている子どもたちが、仲間同志の支え合いのなかで自分の役割を発見することができるわけです。

もうひとつ、子どもたちに必要なのはこういうふうになりたいと思う「モデル」です。いま、子どもたちにとって大人たちは、「遅刻するな」「規則を守れ」といい、将来を心配するふりをしながら「脅して」



くる存在という側面もあります。アスポートには一生懸命勉強を教えてくれる大學生や、白髪になっても一生懸命家庭訪問してくれる人がいる。将来自分もこんなふうになれたらいいな、と思わせてくれる大人が身近にいることは、子どもたちにとって生きる希望になります。

支え合う 平和な社会へ

大人からのあたたかいぬくもり、学びによって広がる世界、仲間同志で支え合うこと、そしてモデルにしたい大人がいること。この4つが子どもの変化、成長にとって非常に大切なことですが、この30年間の競争と管理社会のなかで、全部奪われました。これはまさに大人の責任です。いまの30歳の若者は生まれたときから自己責任社会で、支え合いではなく競争することや偏差値で評価されることが当たり前で育ってきたわけです。教育は社会を決定づけるものです。人が就学前からあたたかい支え合いのなかで育つと、自己責任、競争社会のなかで育

つのとでは、社会はまったく違うものになります。

この30年間の政治は、子どもの心をコントロールする教育に変えていくことや、教員への弾圧などをおこなってきた。憲法や教育基本法、平和と民主主義などが破壊されてきたことによって、学校教育から排除される子どもたちが生まれてきました。それになりたいする私なのたたかいとして、アスポート事業があります。

一対一の対話や、ともにとりくんだことが「ひとつの人生の基盤になった」という教え子もたくさんいます。そういう教え子は、「いまの社会はどうなっているのか」といいます。どんな状況のもとでも、あきらめずに対話をベースにして子どもの声に応える実践をしていけば、それは必ず子どもたちの心に残り、支え合う社会へとつながるものになります。

いま、政府が今後5年間で軍事費を43兆円にも増やそうとしているなかで、憲法を守っていくためにも、社会のベースである教育は大切です。学校、地域、家庭で真剣にとりくまないといけません。そのなかで教員が果たす役割は大きいものがあると思っています。